

Session 3

発表 1

オム・ギホ（トクソン女子大学校兼任教授）

【発表概要】

成果と業績中心に能力を評価する社会となった学校で、同僚教師と学生たちとの出会いと葛藤を通じて教師としての成長を夢見ていた一群の教師たちが、逆説的に、同僚教師たちから断絶され拒絶されることにより、自身を検閲するというジレンマにどのようにして陥っているのかを、「断絶—取締」という概念を通じて分析する。学校では、同僚的な関係が形成されなくなっている。教師たちは互いの仕事にできるかぎり介入せず、公的に異なる意見を提示することすらよしとしない。また、協力ではなく独自に業務を処理しようとする。出会わずぶつかりあわないために、自身を取締り、相手方にただ形式的に「礼儀」正しく行動する。生徒たちとの出会いもまた、徐々に難しくなっている。入試競争は時を経るにつれて激しくなっており、これにより教室は「勉強する子ども」と「散漫な子ども」に分かれる。「勉強する子ども」は入試に役立たない授業は放棄する。「散漫な子ども」は授業自体を総体的に拒否する。生徒たちはできる限り無関係な関係を維持しようとする。教師と学生が互いを「大目に見る」共謀関係が形成されるのである。このような共謀が壊れるとき、教師と学生のあいだの関係は、敵対的な関係に突如変化し、暴力的なものとなっている。